

# ポリネシア・サモア社会の 互酬性と市場経済

山本真鳥

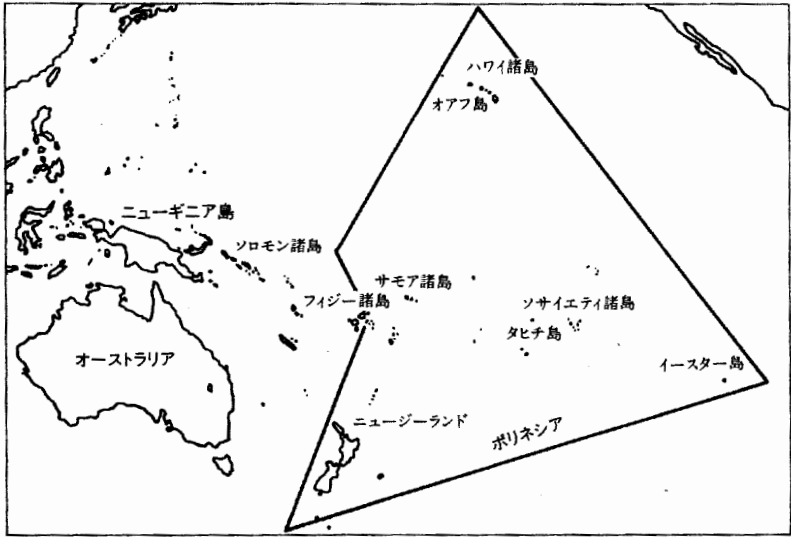
サモア諸島は、19世紀の英・米・独の三国による植民地争奪の結果、1899年に西側の大きなウポル島とサヴァイイ島、その周りの小島（併せて伊豆半島ほどの面積）がドイツ領となり、東側のツツイラ島とさらに東にあるマヌア諸島（併せて淡路島より少々大きい位）がアメリカ領と分断されてしまった。第一次世界大戦を経て、西側はニュージーランド統治領となり、1962年に西サモア（現在はサモア独立国）として独立した。人口約19万人（2011年センサス）。一方東サモアはアメリカ領サモアとなり、自治権は拡大してきているものの独立には至らない。人口5万6000人ほど（2010年センサス）。

この論文の中心は、私自身がフィールドワークで長く過ごした経験をもつサモア独立国であり、断りなく「サモア」と書いた場合は、サモア独立国を指す。この社会は次第に市場経済が入り込んでいるとはいえ、今日でもサブシステム（自給自足）を前提とした大家族の生活モデルを基礎とする社会である。もちろん、首都アピア市とその周辺には現金収入を主とした暮らしぶりが存在し、都市化の影響は日に日に増しているものの、村落部ではタロイモ、タームーイモ<sup>1)</sup>、バンノミ<sup>2)</sup>、バナナ、ココヤシなどの

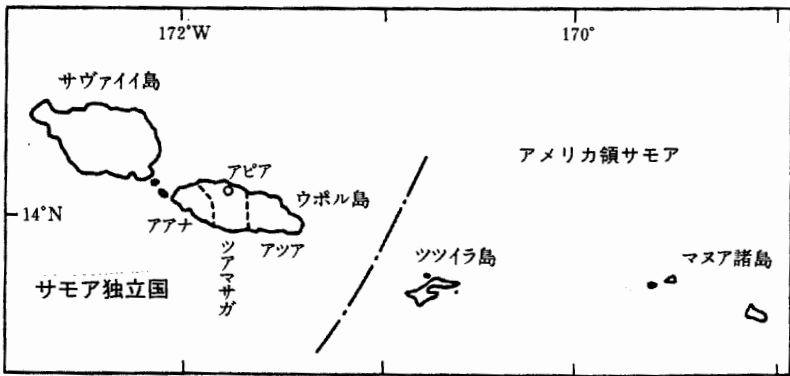
---

1) 日本語でクワズイモとも呼ばれる。外側の毒をむいてはがす必要がある。

2) バンノキから取れる実（breadfruit）。年2回から4回取れ、主食として利用可。ほとんど手入れがいらない。



ポリネシア



サモア諸島

食料生産とバナナ、カカオ、コプラ・椰子油<sup>3)</sup>等の商品作物生産の2本立て、それに加えて主に首都で勤務する家族の現金収入、海外に移民した親族からの送金により成り立っている。おおざっぱには、主食類を自給し、

授業料や電気水道代、衣類などを購入する体制である。もっとも1990年代に始まる観光開発により、観光収入は送金に並ぶ収入をこの国にもたらすようになっており、現金収入の重要性は増している。政府も、人々が少しでも現金収入を得ることができるような政策誘導をしている。

互酬性とは、売買と異なり、相手にものを与える贈与行為の重なりからなる、もののやりとりである。この分野を切り開いたモース『贈与論』（モース 2014）によれば、贈与は 1) 贈る義務、2) 受け取る義務、3) 返礼をする義務、の3つの義務から成り立っており、そこに互酬性という財の交換（やりとり）のシステムがある。互酬性はその都度帳尻が合うというやりとりではないが、贈与の重ね合わせにより、そのうち帳尻が取れるという想定に基づいている。お互い様なのである。サモアの村でのもののやりとりを見る限り、村内では未だ互酬性が大きく経済を律しているが、一方で近代化と共に彼らも市場経済と無関係ではいられない。このセミサブシステム社会において、どのように互酬性に基づく経済と市場経済とが交錯し共存しているかについて、筆者自身の観察をもとに論じることがこの論文のテーマである<sup>4)</sup>。

## サモアの土地制度

19世紀後半に英・米・独の三国会議で土地売買を凍結した結果、土地のほとんどは伝統的共有地となっている。

サモアでは1830年に欧米との接触が始まるが、19世紀半ばになると欧米

---

3) ココヤシからとれる加工品。コプラはココヤシの内側の果肉を干したもので、そこから椰子油をとることができ、石鹸や化粧品材料となる。最近までコプラとして輸出されることが多かったが、現在サモアには椰子油を精製する工場が誕生している。

4) ただし、誤解なきようにお断りしておくが、サモアを「未開社会」や伝統社会の代表選手として描くつもりはない。例えばポスピシルが描く、生産技術的には未開だが、「資本主義」の発達したカパウク社会は進化主義の反証となるだろう（Pospisil 1963）し、同僚と議論を重ねた結果、ニューギニア高地ではもうちょっと自由な市場交換取引があるという感触を得ている。

人がコプラ生産に目をつけて、この地に移り住みココヤシ・プランテーションを開業することもあったし、現地欧米人や現地人に雑貨・薬品を売るなどの貿易商が移り住み多国籍コミュニティが誕生していた。一方で、土地投企を試みて現地人から土地を買うということが横行した。しかし、未だ土地を私有するという観念の薄かったサモアでは、缶詰数個で土地を手放してしまう現地人もいと同時に、自分に何ら権利のない土地を売るとして欧米人をだますサモア人もいて、土地の権利については錯綜した状態が続いた。1889年に「サモア問題」の解決を図る英・米・独が開催したベルリン会議では、この土地問題はひとつの焦点であり、解決のために土地問題委員会が作られた。これまで売買があったとされる土地証書をかかなり厳格に検討した結果、総面積の2割足らずが売買可能地（freehold land）となったが、それ以外の土地は売買不能の慣習地（customary land）となった（Gilson 1970: 409-415）。そして、慣習地についての土地取引は凍結されてしまった。現行では、総面積の81.1%が慣習地、10.7%が政府有地、2.4%が公営農業社（Samoan Trust）有地、わずか3.3%が売買可能な自由所有地（freehold land）となっているが、そのうち0.9%は宅地である（Samoa Bureau of Statistics 2010）。

さて、サモアの大部分となった慣習地は、村および村を構成するアイガ（*‘āiga*）と呼ばれる親族集団のものとされる。村の耕作可能な土地が、伝統的には親族集団ごとに所有されている。親族集団の土地は、集団の長となる高位首長を名目的な所有者とするが、高位首長が亡くなれば、次に首長位を襲名する者が所有者となる。彼は土地を処分するためには、親族集団内の合意が必要であり、これはほぼ不可能である。また、その他のリース等契約も親族集団が合意しなくてはならない。実際に土地は分割され、個々の世帯が占有し耕作するが、売買の権利はもたない。また耕作を放棄すると権利は親族集団全体に戻っていくのである。未開拓の土地が多く、村のものとされる未開拓地を耕作することは、村に所属する個人には認められた権利であり、耕作の結果その土地はその人のものとされ、死後は彼

の子孫が受け継ぐが、共同所有の観念が強いが故に親族集団の土地に編入されることがあったり、そこでもめると複数の親族集団へと分裂したりしていくこともある。

この制度は、土着の慣習法的土地所有制度の延長上にあるものであろうが、接触以前に行われていたままといえるかどうかは確実ではない。現に同じように、植民地フィジーの知事を務めたアーサー・ゴードン卿の影響下で、19世紀末にフィジーやクック諸島でも「伝統的土地制度」保護の政策がとられたが、いずれもイギリス人が考えたところの「伝統的土地制度」であり、それぞれの社会にはイギリス政府により規定された「伝統的土地制度」のせいで大きな変容がもたらされたという評価もある (France 1969; 棚橋 1999)。とはいえ現在のところ、サモアについてそのような批判の声は上がっていない。

19世紀末以前の土地取引の凍結は、今日開発の大いなる阻害要因としてサモア政府を悩ませている。たとえば、美しいビーチにゴージャスなホテルを建てて海外から金持ちの観光客を呼びこもうとしても、サモアの親族集団の中にそのような投資資金を持っている集団はないし、たとえ親族の誰かが持っていたとしても、その開発計画を親族集団が全員一致で認めることはほとんどない。あるいは、海外から資金を持ってくるホテルチェーンにしても、親族の一派を説得できても集団内に反対者は常にいる。現在政府は制度改正を行って、慣習地を抵当に入れて開発資金を借りることができる制度を始めている (Samoan Parliament 2017a) が、もしも融資が焦げ付いたときも、銀行は土地の利用権を得ることはできるものの、慣習地の所有権はあくまでも親族集団のものであるらしい (Samoan Parliament 2017b)。

このような土地制度を持っている社会の所有権（私有権）はどのようなものだろうか。原始共産制に近いものを読者は予想するかもしれないが、それとはまたちょっと違う。なにもかも共有かというところ、そういうわけではない。そして、欧米的な所有権の理念も彼らは理解している。また、現金の利用にも19世紀から次第に慣れてきている。サモア社会はキリスト教

が入ってきてから190年経過しており、高等教育など遅れている点はあるが、識字率はほぼ100%の我々とあまり変わらず、少なくとも20世紀初頭からいわゆる未開社会<sup>5)</sup>ではなかった。

### 行動原理としての一般的互酬性<sup>6)</sup>

確かに、ものの共有ということに関して、サモア社会はわれわれよりは、ずっと踏み込んでいるが、それは原始共産制ということとは少々違うように思う。誰のものという決まりはちゃんと存在し、所有者が無視はされないが、自分のものであるという主張はするべきではないというのはこの社会の掟である。

サモアでは、ものは基本的に分け合うことが重要であり、独り占めは禁止である。ない人はある人から気軽に借りるが、返ってこないことはよくある。サモアの隣国トンガを1960年代に調査した青柳真智子は、以下のような経験をしている。ある日、彼女の使っていた粉石鹸を貸して欲しいという隣人に箱ごと貸したが、一向に返ってこない。やがて隣人のところに行き、「返して」といったのだが、大家さんにおおいに怒られたという。そういうときは、「貸して」といって借りてくるべきである、というのが大家さんの主張だった（青柳 1964）。

似たようなことは、サモアでフィールドワーク中の私もしばしば目にした。近所の親戚の少女が伝言を伝えに来て、おしゃべりしているうちに雨がふってきたら、「傘はないの」といってさして行ってしまふ。一方、数日

5) 未開社会とは無文字社会のことである。

6) 一般的互酬性は、サーリンズが考えた互酬性の3つの形態のうちの一つである。1) 一般的互酬性 (general reciprocity) は、社会的距離の近い間柄でよく生じる互酬性であり、ある人がない人に返礼を前提とせず与える。互いに経済的条件が似通っている場合は、あげたりもらったりしている間に帳尻がとれる。2) 均衡的互酬性 (balanced reciprocity) は、もうちょっと社会的距離のある集団同士で、儀礼的に贈り物と返礼が取り交わされる場合。3) 否定的互酬性 (negative reciprocity) は、敵対する者同士で、相手の財を取り合うのであるが、そこにも一定のルールがあり秩序がある (Sahlins 1972)。

たって雨が降ってきたら、傘のもとの持ち主の家の女性は用事を作って傘のあるところへ行って、「傘はないかしら」といって借りる形で取り戻すのである。また、会議で皆がサインをするとき、ペンが必要だが持っているのは少数しかいない。自分でサインを書いていると臨席の人が貸して、という。しかし貸してあげると書き終わったら、別の人が貸してと……この連鎖が続き、なかなか戻ってこない。しかし、「私のペンは？」や「私のペンを返して」は禁句であるから、辛抱強く待って、何か書くチャンスを作って「ペンないかな」といって、ペンを取り戻すのである。

サモアでは、「私のxx」といった発言はあまり上品とはとられず、人々は「私のもの」であると他人も考えているような文脈でも、「私のxx」という表現の代わりに「私たち<sup>7)</sup>のxx」と述べる。最初にフィールドワークに入った1978年、サヴァイイ島の田舎の村にいたとき、牧師家族の家に滞在していた。その頃近所の人々はサモアの村民の常として、朝食を食べず1日2食であったが、牧師宅は朝食が出る。毎朝7時か8時頃に朝食を食べたあと、牧師夫人はゴザの上に横になって、給仕している娘に「私たちのラジオを持ってきて」と大声でいい、ラジオのニュースに耳を傾ける。英語や日本語でも「ラジオ持ってきて」というだけで、特に所有代名詞は使わないし、サモア語の語法としても「ラジオ持ってきて」ということは可能なはずなのに、毎朝のように彼女は「私たちのラジオ」というのであった。

1つしかないものは分け合う、人が欲しがるとはあげる、多く持っているものは他人に分ける、というのはサモア人のモラルである。儀礼などで入手した、現金、食料、ファイン・マット<sup>8)</sup>など、また何かの都合で入手した現金などは分配の対象となる。儀礼で大きな豚肉の分配を受けたら、

7) サモア語（ポリネシア語族）の一人称複数（三人以上）には、*tātou* (inclusive)と*mātou* (exclusive)とあるが、前者は聞き手を含むものであり、後者は聞き手を含まない。牧師夫人が使ったのは前者である。

8) サモアの貴重財。パンダナスの葉を乾燥させ、女性が時間をかけて編み込んだもの。儀礼には必需品で、互酬的な財の贈与が行われる（山本 2018: 84-85）。

近所にお裾分けしたり、地元の牧師に献上したりするのはごくあたり前のことである。現金は近所に配りまくったりはしないが、儀礼で高位首長が持ち帰ったりした現金、缶詰、豚肉、ファイン・マットなど、必ず親族一同で分配する。

サヴァイ島の先に述べた村に滞在中、カツオ漁に行った漁船が、大量の群れに行き当たり、100尾近い収穫があったとき、半分は町の市場に持って行って売ったが、残りの半分は、牧師も含め、村の各世帯に1尾ずつ配って廻った。

1979年に観察した教会落成式では、村の教団は村内の各世帯から財を集めるのであるが、各世帯は、各地に散在する親族の訪問を受け、財の贈与を受ける。もちろんある程度返礼をしなければならないが、贈与と返礼の繰り返しの中で、現金、食物、ファイン・マットを貯めていき、教団に財を集めて、教団として、大工の棟梁に謝礼を支払う。集まった財のうち、ファイン・マット600枚と現金6300ターラー<sup>9)</sup>、蒸し焼きにしたブタや塩漬け肉の樽や缶詰を贈った(山本・山本 1996: 145)。棟梁はこのうちから、配下の大工たちに稼ぎを分配したが、それでも相当の財や現金が残ったはずである。後日筆者は棟梁の自宅を訪ねて、様子を訊いたところ、あちこちにあった借金を返したあと、新たに親族が借金をしにやってきて、更に儀礼のためにとファイン・マットを無心する人が来て、もうあまり残っていないとの話であった。もう残っていないというのは本当かどうか、ある程度は残っていたかもしれないが、半分以上は真実であろうと思われる。サモア人にとって、ある人がない人にもものをあげるのは当然である。ない人はある人にもらうのが当然だ。

サモアでバスに乗ると、ときどきバス代を払ってくれる人がいる。やはり、お金を持っていそうな地位のある人(役人、政治家、高位首長など)が多い。あんたのバス代、払っておいたよ、と突然言われて、最初の頃は

---

9) ターラーはサモア・ドル、当時は1米ドルよりも大きい価値があった。今は45円ほど。



かなりとまどったが、ごく普通のことらしく、ただありがとうと言えばそれでよい。当時は町で、ホストファミリーの老人（首長）に出会うと、アイスクリームを買いなさいとあって、10セント程度くれたりもした。彼が町に行くのは、買い物もあるかもしれないが、給料日に家族の職場を訪ね、給料をもらう場合もあり、海外からの送金を郵便局などで受け取る場合もあった。つまり一時的に多額の現金を持ったから、そういう行動になったのかもしれない、と今になって思う。

私が最初に調査に入った頃には、文明国からやってきた調査者の常として、何箱ものバンドエイド、数多くのボールペンを持ち込んでいた。しかしそれは、机の上に置きっぱなしにしていると次第に消えていく運命にあった。ホストファミリーの若い人々にしてみれば、大量にもっているのだから、分けるべきであるということになる。そういうときには、否定的互酬性の原理に基づき、盗ってしまっても盗った人は罪悪感をもつことはない。サモア人はそういう行為を手取る (*tago*) というが、英語でもっばら、つまむ (*pinch*) ということもあり、これは、盗む (*gaoi*) とは違うものとして認識している。他愛もないいたずら的な行為であり、家族内での笑話的出来事なのだろう。隠していたせんべいを食べられてしまったときには、ホストファミリーの主人たる老人は、「ネズミがいるんだな。2本足の」というていた。明かに、独り占めしていたのが悪い、のである。

*Gaoi*というのは、例えば、他の親族集団のメンバーが育てている作物を無断でもって行ってしまったときに用いられる。先に述べたように、土地はどの親族集団に所属するかがはっきりしているのであるから、異なる親族集団の土地に生えているものを勝手にとれば、*gaoi*となり、これは村の首長会議で、個人ではなく、盗人の所属する親族集団全体が罰を食らうべき所業である。欲しいときには、くださいとお願いすれば、断られることはまずないので、無断でもっていくのは親族集団の主権を侵したと考えられるかのようだ。

*Tago*はあたかも、一般的互酬性で、たくさん持っている人が人々に与え

るべきものを惜しむ行為、すなわちサモア人の誰もが批難する吝嗇 (*aiū*) に罰を与えるような行為である。否定的互酬性<sup>10)</sup> は、サーリンズは敵対集団同士にしか想定していないが、ここで行われているのはまさに否定的互酬性であり、親しい間柄でも起こっていることなのだ。

同様の例は、女性開発事業で裁縫の技術を学んだ女性の経験として、倉光が語っていることとも結びつく。倉光は3名の対照的な背景をもつ女性を取り上げて、その経験を説明している。裁縫の技術を生かして、村内でテイラーとして仕事を受ける女性は、持ち込まれた布地で縫い物を完成して手間賃をとる、というのが常識となっているが、一方で、それは定額でもないし、注文主があとで御礼として支払うものとなっている。裁縫の手間をプレゼントしたのに対して、御礼をするといった形である。夫が政府の役人であり高収入を得ている核家族に暮らすある女性は、仕事をしても村内の注文主が御礼を支払わない、ということに悩んでいる。他の女性たちは、問題なく手間賃をもらえているのに、である。倉光は問題の女性の夫が高収入で、人々はこの女性の好意に対し、支払いが必要とは思っていないようだと言っている。既に現金をたくさん持っているのだから、これ以上現金をあげることはない、ということだ。手間賃を取れないこの女性は結局依頼を断るようになり、現金収入の道は立っていない(倉光 2001: 275)。

## 親切と愛情

儀礼交換に際して、訪問者側から財の贈与が行われ、それに対して受け手側から返礼が行われるのであるが、多くの場合訪問者側に対し返礼は3分の2ほどであることが多い。しかしそこで、この際多く贈っておいた方が何かと都合がよいというわけで、贈り主に持参した財よりも多くの返礼

---

10) 注3参照。

がなされることもある。贈る財は多ければ多いほど良く、限度というものはない。要するに、贈り物合戦がここで繰り広げられるのである。そのようなとき、双方は相手方の贈与に対して、*agalelei*（親切）をありがとう。あなたの贈与は、*matagōfie*（美しい）とってほめるのである<sup>11)</sup>。儀礼交換に際して行われる財のやりとりは、さまざまな慣習にとりまかれ、必ず返礼がされなくてはならない均衡的互酬性であり、財を取り交わす親族集団同士は婚姻により結びついている。

このように姻族に過分の贈り物をする人に対して、人々は愛情 (*alofa*) 深いと表現する。ある離婚した元カップルについて、親族の1人に理由を尋ねると、妻がわがままであるという。夫はちょっとした事業をやっている、お金もあり、愛情深かった、という。それはどういう意味かと訊ねると、妻の実家にあのときはあれをくれた、別の時には子ども全員におもちゃをくれた、いつも何かと心を砕き、いろんなプレゼントをしてくれる愛情深い人だった。それを、浮気をしたからといって、あっという間に実家に出戻ってきた妻は、強情っぱりだ、という評価になる。*Tele alofa*（愛情がいっぱい=愛情深い）というのは、欧米流に妻に「愛してるよ」とことばで愛情表現することではなく、姻族（妻の実家一族）に折に触れ贈り物を忘れないマメな人のことをいうと理解できる。

また、姻族のところに多くの財を持参して儀礼交換に参加する理由を尋ねると、それは嫁に行った一族の女性に対する愛情だ、と答えることが多い。彼女が姻族の中で暮らしているのだから、実家から十分な財が贈られていくなら、彼女も鼻高々で肩身の狭い思いをしなくて済む、という訳である。また逆に、嫁に来ている人の実家に姻族として儀礼交換の財を贈るのは、親族集団の一員である夫に対する愛情である。彼は姻族として義理を果たす必要があるので、それを一族で助けてやるのだ。一族の一員たる男性に対する愛情で財を持参する、という訳である。

11) *Agalelei*は*aga*=行い、*lelei*=良い、という2つの単語に分解できる。*Matagōfie*の場合は、*mata*=見る、*gōfie*=し易い、見るのに苦勞しない=美しい、となる。

## 贈与と互酬性

しかし、互酬性の原理で財が贈り贈られているときも、全く義理や愛情のみで人々が動いているわけではない。資本主義下で生きている人間とは別に、むしろ互酬性のルールを熟知した上での計算高さを人々は持っている。

例えば、欧米との接触以前、身分の高い男性、すなわち高位首長ないしはマナイア (*mānaia*, 高位首長にいずれなる王子格の称号を持つ男性) はよその村のタウポウ (*tāupou*, 村の王女格の称号をもつ女性) と結ばれるのが順当であったが、高位首長付きのツラファレ (*tulāfale*, 儀礼首長) は、必死になって君主にふさわしい女性を探して縁組づくりに励んだという。もちろん政治的野心から動いていたといえる場合もあるが、君主が結婚式を行えば、タウポウの村からファイン・マットが大量に持ち込まれて君主との間に儀礼交換のやりとりが生じ、ツラファレにはファイン・マットが数多く転がり込んでくる、という成り行きを予想してのことだという説もある。離婚してもファイン・マットの返還はしないので、次から次と新しい縁談を持ち込んで、その度にファイン・マットをせしめたとも言われる。

儀礼交換で用いられる財には、20世紀始め頃から、現金や、購入が可能な食品（樽入り塩漬肉）などが取り入れられるようになっていた (Handy and Handy 1924: 16)。この後、筆者の調査開始 (1978年) 頃には、魚肉缶詰のカートンやコーンビーフ等も加わっていた。近年、塩漬肉は廃れ、アメリカ領サモア経由で輸入されるようになったブロイラーの冷凍チキンレッグなども用いられるようになってきている。儀礼そのものの中で、現金が贈り物アイテムとして授受されていたことも事実であるが、現金が万能として使われるのではなく、一定のルールの下で交換アイテムとして使われていることは特筆に値する。ちょうど日本では香典に必ず現金を包むとされているように。

以上のように、食物のカテゴリーには現金を用いて購入可能な物が多分

に取り入れられる傾向にあったが、ファイン・マットはどうだっただろう。ファイン・マットの場合、町の市場で売買が可能ではあったが、最近でこそ取引数も増えているものの、かつてはあまり取引がなかった。私のサモア語の先生に尋ねると、買うのはいいが、売るのはみっともない（マタゴーフィエの反対のマタガー（*matagā*））な行為であるという。

売買ではなく村内でファイン・マットを調達するのは、トトマ（*totoma*）と呼ばれる行為である。トトマとは、ファイン・マットをもっていると思われる人のところに出かけていき、実は急に儀礼交換<sup>12)</sup>がおきて必要性がでてしまったが、持ち合わせがなく困っている、と伝えることである。すると乞われた人が運良く所持しており、手放すことが出来る場合は、1枚ないしは複数枚をくれる。その場合、儀礼で交換されるファイン・マットの相場である金額<sup>13)</sup>を厚意に対する御礼としてさし上げるのである。

何だ、売買と同じじゃないか、と我々は思ってしまうが、売買と違う理由は、値段をつけて商品交換を行うということでないところである。ファイン・マットを手放す人も、代わりに金銭を差し出す人も一切、いくらならどうすると決めずに、好意で相手にものをあげている点が、売買とは違うとサモア人が考えるゆえんである。このとき、儀礼で交換レートとされる金額は、市場でファイン・マットを調達するときよりもずっと安いのである。また、お返しは余裕があれば、現金で渡せるが、持ち合わせがないこともある。その場合には、儀礼に行って贈与をすれば、食料や現金などのお返しをもらえるので、それを、ファイン・マットを譲ってくれた人に渡す。場合によってはファイン・マットが返礼品として返ってくることがあるので、その場合には無傷でファイン・マットを返すことができる。

先に述べたように、断らずによその土地の作物をとると盗みと判断されるが、ちゃんと許可を得て取る場合人々は寛容である。許可を得ることを

12) こういった急な儀礼交換は、葬式であることがほとんど。

13) 1980年前後は1枚10ターラーであった。しかし1990年代は、5ターラー。政府がファイン・マットの品質改善に取り組むようになってからは、マットの質により相場は千差万別である。

ファアノイ (*fa'anoi*) という。これは、他人の土地に立ち入るときも同じである。サモアでは宅地に垣根等の境界の印がない場合がしばしばあるが、それでも他人の土地を横切ることはしてはならない。ファアノイをもらえば問題はない。ただしファアノイを求めて断られることはないからといって、求めないと大変なことになる。所有権はないようであるのだ。

ファイン・マットや寝具マットの材料であるパンダナスの葉は、どこの家の敷地にも生えているものではない。しかし生えている場合、さほど手入れをしなくても育っている。それを利用するときには、必ずお願いをし、ファアノイをもらって採取する。子どもにいつけて採取させる場合もあるが、観察していると必ず子どももファアノイをもらうべく口上を述べる。そうやってパンダナスの葉をもらったときには、必ず何か、何でもよいし、すぐでなくてよいので、何らかの御礼をするのが、サモアの常識であるようだ。料理を多めに作った時に子どもに持たせたり、儀礼交換で得たコーンビーフの缶詰<sup>14)</sup>などを渡したりする。できあがったマットを2～3枚あげるのもよい。

## 市場交換（売買）vs 互酬性

さて、それではサモアの売買<sup>15)</sup>とはいかなるものとなっているのだろうか。先に種明かしをすると、人々が普通に抵抗なく現金を使うのは、海外から入ってくる輸入品の工業製品である。これらは、町のスーパーや村のよろず屋で売っている。よろず屋はちょうどフィリピンのサリサリストアのようなもので、小さな小屋から間口10メートルほどの大きな店まである

14) われわれが見慣れているサイズよりずっと大きく、3ポンド (1,350g) や6ポンド (2,700g) など。

15) サモア語で、売ることはファアタウ・アツ (*fa'atau atu*)、買うことはファアタウ・マイ (*fa'atau mai*) という。ファアタウとは交渉するという意味であり、アツとマイはそれぞれ、自分に近くなる移動、遠くなる移動をさす。

が、そこで扱う商品は、マッチ、缶詰、ケロシン、砂糖、シガレット、トイレットペーパー、蚊取り線香、ゴムゾーリ等、ほとんど例外なく輸入品である<sup>16)</sup>。唯一、毎朝早朝デリバリーがあるパンやケーキだけが国産である（もっとも小麦粉は海外産であるが）。

儀礼交換に用いる缶詰等になると、村のよろず屋ではまかないきれないので、町の間屋まで行って買うことになる。儀礼交換に用いられる多額の現金は、海外に移民した親族からの送金や給与生活者が銀行にローンをしたりして調達することが多い。

アピア市には、サモア産の生鮮食料品を売買する公営市場が存在する。私が調査を始めた頃、ニュー・マーケットと呼ばれていた市場は拡大に拡大を重ねたが、それでも手狭になり、現在少し内陸に入った土地に移転し、これもまたニュー・マーケットと呼ばれている。旧ニュー・マーケットは現在では、生鮮食料品部門を欠いているが、それ以外の部門は続いている。現ニュー・マーケットは、タロイモ、バナナ、パンノミ、ココヤシなどの農産物に加え、パパイヤ、パイナップル、マンゴー、オレンジなどの果物を売る青果市場、魚介類を売る魚市場などの他に、揚げドーナッツやランチ、土産物や衣料品、そしてファイン・マットなどの売店も備えている。後者の店は常設であるが、前者の生鮮食料品市場は、それぞれの生産者が自分の畑から収穫があったとき、海で獲れたときに売っていることが多い。最近、近郊の村々では、トマトやナス、キャベツなどを作る人々も増え、それに加えて果物も豊富である。サヴァイイ島の港町サレロロガの公営市場も以前に比べると著しい発達を見せている。またサモア唯一の工業地帯であるヴァイテレ村にも、10年ほど前に公営市場が誕生している。これら公営市場の取引は例外なく現金取引である。

町にはスーパーマーケットもあるが、そこでは主に輸入品（工業製品）

---

16) 2010年頃から、首都アピアに近い村落のよろず屋で、若干の果物やキャベツなどを扱う場合が出てきたが、私の調査している中ではごく最近の現象で、扱う店も少ない。

の食料，すなわち缶詰や冷凍で運んでくる肉，ソーセージ，インスタントラーメン，ロングライフミルクなどや，雑貨が売られている。生鮮食料品としては，バナナなどの現地産も売られているが市場よりは高値で，サモアでは産しないリンゴやイチゴ，ニンジンなどの輸入ものが主である。村のよろず屋では売っていないような電化製品，コンピュータ関連用品，ケータイ電話など工業製品も町では購入可能である。ここではむろん現金取引やクレジット・カードなどの取引となる。しかしサモア人でクレジット・カードなど使う人はごく少数である。

興味深いことに生鮮食料品を現金で取引できるのは，これらの町の市場だけである。村では互酬性という倫理が支配しているので，隣の人と金銭を介して取引することを人々はためらう。くださいとってもらい，この間はありがとうとって御礼をする，というのが村の流儀なのだ。トマトを食べたいときには，町までバスで出かけ，町の市場で買う。トマトを栽培する村人も村にトマトを食べたい人がいると分かっているにも拘わらず，トマトを売るときには町の市場へ出かけて売る。時には，市場で隣人と出会い，トマトを売ったり買ったりすることもある。両方ともにバス代をかけて町まで来て，はじめて現金取引ができることになるのだ。唯一，住居付近で現金を介して取引をするときには，島を取り巻く幹線道路に向かって店開きをする。これはほとんど魚を売るときに限られているかもしれない。この売り方のとき，主な買い手として想定されているのは幹線道路に行く乗用車やピックアップ・トラックに乗っている人々で，村人ではない。ホームステイ先の家長の老人と村内を歩いていた際に，彼はこのような売り手に「ビジネス，うまくいくといいね」と声がけしていた。道路は町の延長としてとらえられているようである。近年，町に近い幹線道路沿いには，スーパーマーケットも誕生している。

また，ほぼ輸入品の取引に限られるよろず屋も町の延長かもしれない。しかし，よろず屋は実際には，町のように現金取引で決済が終了しないことが多い。というのも，よろず屋の客は村人であり，村人对村人は互酬的



関係を引きずらざるを得ないからである。よろず屋でしばしば行われているのは、アイターラフ (*aitālafu*, 借り) という会計である。よろず屋の店番はその都度、ノートに貸しをつけていき、借り主に給与が入ったときや海外の親族からの送金があったときに精算してもらう。ただしよろず屋にとってアイターラフは危険きわまりない。アイターラフを許しているうちに貸し倒れが生じて行くと、しまいには仕入れの支払いに困るようになる。村のよろず屋を見ていると、5年維持できている店は数少ない。海外移民からの送金や、出稼ぎで稼いだ資金を元によろず屋を始めるが、やがてつぶれてしまうのが常である。アイターラフを許さない店、というのもあるが、このように心を鬼にすることはサモア人にはなかなか難しいようだし、アイターラフを許さない店より許す店に普通は客が集まる。

### 町と村の認識論的対立

町 (アピア市) は、19世紀以来、村の慣習法の外に置かれた地域であった。外国人の多く居留するアピアは、英・米・独三国の最終決議 (1889年) 以後、法律上 *Apia Municipality* として、領域を定められた外国人租界となった。サモアの慣習法の圏外として、欧米の法律、規則が適用され、サモアに滞在する多国籍外国人の自治が行われていた。実際には19世紀半ばから萌芽的組織はできあがっていた。1900年からのドイツ植民地統治と共に、外国人自治は廃止されるが、村は慣習法が適用されると共に、アピアはドイツ領事法が有効な地域とされた。さらにネイティブと外国人の身分は厳密に二分されていた。第一次世界大戦後ニュージーランド統治となっても、ヨーロッパ人とサモア人<sup>17)</sup> という身分上の区分が存在していた。ヨーロッパ人とは実質的にサモア人との混血がほとんどであり、一般的に彼

17) 最初は白人とネイティブという名称となっていた。「ヨーロッパ人」のカテゴリーには、半分以上ヨーロッパ人の血をもつ混血が分類されているのみならず、自由人として入国した中国人もこのカテゴリーに入れられていた。

らはアフアカシ (afakasi, 混血) と呼ばれたが、人は必ずこのどちらかに区分され、それぞれの権利もまた異なっていた。サモア人カテゴリーの人は、慣習地にアクセスでき、首長の称号を得ることも可能であったが、ヨーロッパ人にはそれは許されていなかった。しかし、ヨーロッパ人は、サモア人には禁止されている会社を所有する権利、アルコール飲料を飲む権利があった。この区分はサモアが独立することとなったときに、次第に垣根を取り払う方向で動いていったのであるが、町と村がさかさま世界であるという認識には、このような人種政策的背景もある (山本 2003)。

独立後もアピアには政府や外国政府公館が置かれ、近代的な制度が導入されたが、村の統治は慣習法と村の首長会議に任されていた。かつて監獄を除けば2～3カ所程度しかなかったポリス・ステーションは近年増加しているが、それでもまだ警察は社会全体には浸透していない。村の秩序を守るのは首長会議と若者組であり、政府のアウトリーチは、警察とは別の役所に設けられた村長の全国組織などで行われ、警察自体も各村の首長会議の役割は評価している。

植民地統治下での以上のような政治的二重構造の中で、町と村とは対立する2つの価値観の象徴するそれぞれの圏・空間として、人々の意識の中で認識されているのは当然のことである。

かつて著者が書いたエッセイ「辛い水・苦い水—南太平洋サモアのカヴァとビール」(山本 1985)を簡単に紹介しよう。カヴァはポリネシアにある習慣的飲料で、同名の灌木を乾燥させ、その根を砕いて水に浸した上澄み液である。飲み方には作法があり、儀礼に用いられる。村では伝統的に首長会議の会合の始めにカヴァ儀礼が行われるのであるが、ここで確認されるのは村の首長位の序列である。すなわちカヴァ儀礼は村の秩序を体現するものとなっているのである。カヴァはカヴァ酒と紹介されることもあるが、酒と反対に鎮静作用があり、飲めば飲むほどに理性的になる飲み物である。一方で、伝統的にアルコール飲料を持たなかったサモアでは、独立後から徐々にビール消費が拡大しているが、私が調査に入った今から

40年前には、これは村の秩序を乱すものとして、老人や女性たちには大変不評であった。若い男たちを中心に、少ない稼ぎで高価なビールを消費し、おまけに村の中で暴れ回ったりするからである。一家の貴重な現金収入を費やすことにも批判が多かった。ビールを販売禁止とした村もある。町で働く近郊在住の男性たちは、給料日には町でビールを飲んでどんちゃん騒ぎをし、バス便終了後に数キロメートルを歩いて帰宅することもあった。

村の飲料であるカヴァは理性や秩序に関わるもの（アポロ的）であり、町の飲料であるビールは人々を高揚させ、反秩序（ディオニソス的）であるという、相対する二元的価値観がそれぞれの空間に結びついているところが興味深い。もちろん、人々は村にいれば、ビールはとんでもない、というが、町に出れば飲むこともあったし、泥酔しない限りは許容されていたのだ。

さて、空間認識としての町と村の対立はそれだけではない。

ヨーロッパ人の主たる居住地である町は海外へと結びつき、パラギ（*pālagi*, 白人）の世界へと結びつく。パラギの世界では、サモアの道徳は通じない。

「21歳を過ぎたら親から独立をして親の指示は受けなくなる。ホテルに泊まったら宿泊代を請求される。パラギの世界は争いごとばかり。」「サモアはどうだ、静かだろう？ サモアはアロファ（愛）に満ちていてタダで家にも泊めてやる。サモアでは子どもはいつまでも親のいうことを聞き、親を敬うのだ。」「パラギの世界に働きに行っている若い衆は、おカネがなければあっちでは暮らせない、という。でもサモアでは、カネなんてなくても、誰かが食べ物は分けてくれるし、何とかなるんだ。」

このような言説をいったい何人のサモア人から聞いたことだろう。パラギの世界はお金の支配する冷たい社会であるとサモア人は考えているのである。

## 市場交換と互酬性

政府は現金経済の重要さを強調し、人々ができるだけ現金にアクセスできる体制をとろうとしている。女性の現金獲得手段として、ファイン・マット復興運動<sup>18)</sup>を始めた（山本 2018: 232-239）が、それは現金収入拡大、ひいては市場経済の拡大という大きな課題の一環である。隣国のアメリカ領サモアは、アメリカ海外領土の一部であることから、連邦政府の資金が投入され、さまざまな福祉政策やアメリカ本土への自由な出入、本土並とまではいかないが、本土に近い最低賃金の実現できていた。西に比べて現金経済の浸透は著しいものがあった。それに対し、「武士は食わねど高楊枝」状態で、サモア文化を守ってきたサモア独立国であったが、ここところ様々な開発計画が進んできて、一人あたりGDPは4000USドルを超え、アメリカ領サモアの1/3を越える<sup>19)</sup>までに成長してきた。

しかしそれでも、サモア人の考え方の中では、モラル・エコノミーとしての互酬性はサモア人のアイデンティティに関わるものとして大変重要である。町と村との空間的価値観の対立にそれは見ることができる。人々は海外の新しいものには興味があり、それらを入手するために市場交換の行われる町を必要としながら、村の価値観もまた大事にしている。村という空間の中であって現金を介さない人と人との間を互酬性でつなぐ経済活動を村の人々は好み、現金のやりとりがあってもそれが互酬性と深く関わるように細心の注意を払うのである。

互酬性の価値観は、未だサモア人の生活の中で重要なものとなっている。

---

18) ファイン・マットは、儀礼財として儀礼交換の主役であり、伝統文化の下ではその生産を担う女性たちの誇りであったが、近年粗悪化が著しく、誇りといえないような代物になってしまっていた。かつての念入りなファイン・マットの生産技術を伝え、奨励すると共に高額で販売することで、女性の誇りを取り戻すと共に、女性の現金獲得をめざしたところに復興運動の主眼がある。

19) World Bank Data 2017.

**【献辞】**

この論文は、筆者のこれまでのサモアでのフィールドワークから抽出したものであり、それらすべての研究の機会を与えてくれた研究所、財団、基金等に感謝を捧げたい。また観察と会話につきあってくれたすべてのサモア人の友人たちにも御礼を申し上げる。

**参考文献**

- 青柳まちこ（1964）『秘境トンガ王国』二見書房。
- 倉光ミナ子（2001）「所得創出プログラムの評価に関する一考察—サモアにおけるソーイング技術指導プログラムを事例に」『人間文化論叢』3: 270-281.
- 棚橋訓（1997）「裁かれるマオリ・カスタム—ポリネシア・クック諸島と土地権法定」山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化—人類学のパスペクティヴ』東京：新曜社。
- ポランニー、カール（玉野井芳郎・栗本慎一郎訳）（2005（1977））『人間の経済Ⅰ』東京：岩波書店。
- モース、マルセル（森山工訳）（2014（1923-24））『贈与論 その他2編』東京：岩波書店。
- 山本真鳥（1985）「辛い水・苦い水—南太平洋サモアのカヴァとビール」『法政』12（7）: 24-27.
- 山本真鳥（2003）「上からの統合、下からの統合—サモア社会の国民統合と村落構造」山本真鳥・須藤健一・吉田集而編『オセアニアの国家統合と地域主義』大阪：国立民族学博物館地域研究企画交流センター，pp.317-354.
- 山本真鳥（2018）『グローバル化する互酬性—拡大するサモア世界と首長制』東京：弘文堂。
- 山本泰・山本真鳥（1996）『儀礼としての経済—サモア社会の贈与・首長制・セクシュアリティ』東京：弘文堂。
- France, Peter (1969) *The Charter of the Land: Custom and Colonization in Fiji*. Melbourne: Oxford University Press.
- Gilson, R.P. (1970) *Samoa 1830-1900: The Politics of Multi-cultural Community*. Melbourne: Oxford University Press.

- Handy, E.S. Craighill and Willowdean C. Handy (1924) *Samoan House Building, Cooking, and Tattooing*. Honolulu: Bernice Pauahi Bishop Museum.
- Pospisil, Leopold (1963) *Kapauku Papuans of West New Guinea*. NY: Holt, Rinehart and Winston.
- Sahlins, Marshall D. (1972) *Stone Age Economics*. Aldine.
- Samoa Bureau of Statistics (2010) Environment Indicators: Samoan Land Ownership.
- Samoa Parliament (2017a) Alienation of Customary Land Amendment Bill 2017. (<http://www.palemene.ws/new/wp-content/uploads/Alienation-of-Customary-Land-Amendment-Bill-2017-Eng.pdf>) (2020/01/06)
- Samoa Parliament (2017b) Alienation of Customary Land Amendment Bill 2017: explanatory memorandum. (<http://www.palemene.ws/new/wp-content/uploads/EM-Alienation-of-Custom-ary-Land-Amendment-Bill-2017-Eng.pdf>) (2020/01/06)

## Reciprocity and the Market Economy in Samoa, Polynesia

Matori YAMAMOTO

### 《Abstract》

The purpose of this paper is to examine the intricate relationship between reciprocity and the market economy in the semi-subsistence society of Samoa, Polynesia. While the local economy in the villages is dependent on subsistence farming, which is based on customary land tenure and provides staple food for the family, cash incomes are becoming more and more important with the advance of the market economy. The colonial powers introduced two different categories of status: 1) Europeans – actually, part-Europeans – and 2) Samoans from more than 100 years ago. Europeans, actually half-Europeans mostly, were the people who belonged to the urban area, leading to a capitalist economy of management and cash transactions, while Samoans belonged to the villages, leading to a subsistence economy of village farming and fishing in the sea. While Europeans managed companies, Samoans managed their customary lands and customary laws. The bar dividing the two categories has not existed since Samoa's independence more than 50 years ago. Nevertheless, the economic morality of reciprocity is still very strong in Samoan villages and among Samoan families, while capitalism and the market economy belonging to urban area and overseas in the Samoan view, is not easily entering Samoan village life.

